

令和5年度 学校関係者評価報告書

評価点

自己評価		学校関係者評価	
A	高いレベルで達成できた	A	とても適切である
B	達成できた	B	概ね適切である
C	一部達成できなかった	C	あまり適切でない
D	ほとんど達成できなかった	D	適切でない
		E	判定できない

学校(園)名：広島大学附属中・高等学校

分野	重点目標 (評価項目)	年度計画(中期計画・ 中期目標)との関連性	具体的方策	成果指標・判断基準	自己評価		学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
					達成状況、改善策	評価	意見・理由	評価	
学校運営	学校運営	【学部・研究科等と連携、実践的な実習・研修の場の提供、全国・地域における先導的な教育モデルの開発、成果を展開することで学校教育の水準の向上を目指す。】	①中等教育に係る研究組織体として、研究組織と校務分掌組織との連携強化、教職員間での学校が目指す教育ビジョンの共有。 ②学校経費の節約と戦略的な執行、別枠予算の申請と獲得。	①教育ビジョンを共有し学校運営を円滑にするため、運営委員会、校務分掌会議、教科会議、学年会議を学期中にはそれぞれ週1回開催する。 ②学長裁量経費等を積極的に申請し、教育環境改善の予算を獲得する。	①中等教育に係る研究組織体として各校務分掌、学年、教科において週1回会議を開催し、教育ビジョンの共有と研究組織と校務分掌組織との連携を行った。 ②令和5年度は学長視察が行われ、安全で快適な教育環境の整備を強く要望した。和式トイレ(27か所)の洋式化改修、難病生徒が利用する教室環境の整備、テニスコートフェンス増設改修等を実施いただいた。	A	①②学校経営目標の実現へ向けて研究組織と校務分掌組織との連携強化、教職員間でのビジョンの共有ができています。安全で快適な教育環境改善に向けた取り組みに期待する。	A	①②学校運営全般にわたる業務において、運営委員会を中心として課題の共有と解決に向けて取り組み、学校運営の改革を推進する。予算確保に向けた戦略的な執行により安全な教育環境改善を図る。
	人事	【学部・研究科等と連携、実践的な実習・研修の場の提供、全国・地域における先導的な教育モデルの開発、成果を展開することで学校教育の水準の向上を目指す。】	①校務分掌の部長、委員長等に若手教員も積極的に選任し、経験豊富な教員からのサポート体制を構築。 ②外部研修の受講のみならず、研修講師等を引き受けることも推奨し、教員の職能成長を推進。	①ミドルリーダークラスが活躍できる会議運営を行い、教員としての資質能力を向上させる。 ②研修会への受講、他校の教育研究大会への積極的な参加の促進、研修会講師等を積極的に引き受け、教員の職能成長を推進する。	①運営委員会構成員に30代教員も加え、ミドルリーダークラス育成の一助とした。アカシア賞候補者選考委員長も30代教員が務めた。 ②すべての教科において多くの教員が学会参加、発表等による教科に関する研修を行い、主体的に職能成長を図っている。学校運営等に関する教育センターの研修受講等も促したい。	B	①②学校運営の現状を踏まえてミドルリーダークラスが活躍できるよう人材育成がなされている。教員数の十分な確保、安定した人事により、教育水準の向上を目指した取り組みに期待する。	A	教員の職能向上のため外部研修への積極的な参加を促進し、教員研修の機能強化を図る。
学校運営	広報	【学部・研究科等と連携、実践的な実習・研修の場の提供、全国・地域における先導的な教育モデルの開発、成果を展開することで学校教育の水準の向上を目指す。】	①教育研究大会の開催、刊行物の発行、Webページの活用等により、先進的、先駆的な研究推進校としての教育・研究活動を広く発信、提供。 ②入学希望者に対する学校広報の推進。	①教育研究大会(11月)、SSH成果発表会(2月)の開催、研究成果や研究紀要等刊行物のWeb公開により、成果発信する。 ②学校説明会、学校案内を創意工夫して入学希望者へ情報提供し、少子化の時代にあっても入学希望者数を現状維持、下回っても昨年比5%以内に留める。	①SSHの実践をはじめとして、教育研究大会の記録、授業実践事例等、実践研究成果をWebページで広く公開している。 ②高等学校の学校説明会は6月と9月に各1回開催し、6月380名、9月130名の参加があった。説明会後のアンケートでは肯定的回答96%であった。中学校の学校説明会は9月に3回開催し、合計約1900名の参加があった。学校紹介と在校生のインタビューによって本校の魅力への理解が深まるように充実させた。しかし、令和6年度中学校志願者数は昨年比約60名(6%)減、高等学校志願者数は約40名(9%)減であり、さらなる対策を検討したい。	C	①教育実践の成果、刊行物を学校Webページに公開し、発行物の内容が豊富で広報活動が充実している。 ②学校説明会は参加者から高く評価され、学校広報活動が充実している。少子化の時代にあつては今後も志願者数の維持、向上のための創意工夫を期待する。	B	①先進的・先駆的な研究活動を通じて、持続可能な社会づくりの担い手を育む。学校Webページを通して教育実践、研究開発の成果を継続して公開する。 ②学校説明会等により入学希望者に対する一層の広報活動の充実を図る。
	PTA等の諸組織との連携	【全国あるいは地域における先導的な教育モデルを開発し、その成果を展開することで学校教育の水準の向上を目指す。】	①教育環境充実への人的支援を主な目標とするPTA活動の充実。 ②教育環境充実への財政的支援を主な目標とする教育後援会との連携強化。	①保護者と学校の協力による研修会を年1回以上開催し、PTA広報誌は年3回発行する。年度末の学校評価(保護者)学校評価アンケートにおいて「学校の楽しさ」等に関して肯定的回答80%以上を得る。 ②教育後援会役員会を年3回開催して参考となる意見を集約し、教育環境の充実に資する予算執行を進める。	①全附P連全国大会(9月)、中附P連松江大会(11月)が対面開催となり、それぞれPTA役員と教員が参加した。中附P連松江大会では、実践活動事例「今、求められるPTAのあり方とは～時代の要請に即したサステナブルなPTAを目指して～」を発表した。体育祭(6月)では、PTAによる観覧者の人員整理により体育祭の円滑な運営への協力、文化祭(9月)ではPTAが保護者交流を目的として「サロンド・FZK」を企画・運営し、盛況であった。PTA広報誌「むつ」は計画通り3回発行した。「学校の楽しさ」に関して保護者の肯定的回答は91%であった。 ②教育後援会役員会を年3回開催し、全附P連等の全国組織から今年度得られた新たな情報を参考に、教育後援会のあり方、教育環境改善への意見交換を継続している。	A	①PTAと学校との連携は非常に良好である。生徒と学校の懸け橋として、PTA活動の充実と協力により、教育環境の充実が見られる。体育祭等学校行事において、PTAによる協力、運営支援を得て円滑な実施ができています。 ②教育後援会との連携は、教育環境の充実に向けて適切な予算執行につながっている。	A	①保護者と教員との研修を深め、PTAと学校との連携・協力関係を一層強化する。SNS上でのトラブルに関する社会の情報をもたえてPTAと連携して取り組む。 ②教育後援会との協議を定期的にを行い、教育環境の改善をはかることができるよう支援を受ける。
教育活動	学習指導	【国際標準の学力を育成するための先導的な次世代カリキュラムの開発を進める。】	①国際標準の学力育成を目指す教育の推進、思考力・判断力・表現力の向上を図る学習活動の充実。 ②キャリア教育の充実、資質育成による進路実現の支援。	①授業を充実させ、学校評価(生徒)アンケートで「授業の理解、学習内容、学習評価等」に対する肯定的回答80%以上を得る。 ②大学、地域、企業、アカシア会の協力を得て、キャリア支援を図る講座や行事を実施し、学校評価(生徒)アンケートで「進路指導の充実」に関して肯定的回答80%以上を得る。	①SSH研究開発を基礎として探究的活動の充実した学習指導を進めた。「授業の理解、学習内容、学習評価等」に関して生徒の肯定的回答90%であった。高校3年で化学クラブ2023銅賞、生物学オリンピック2023銀賞の受賞者があった。SSH課題研究では広島県科学賞特選等、優れた評価を得た。 ②アカシア会からの絶大な支援によりキャリア講座を実施し、生徒のキャリア意識を向上させている。「進路指導の充実」に関して生徒の肯定的回答81%であった。	A	①学習指導に関する生徒の肯定的評価が9割を超えており非常に高い満足度が得られている。SSHの推進、ESDの推進などの先導的なカリキュラムの導入により主体性のある高度な能力の育成がなされている。 ②キャリア教育について、アカシア会をはじめ、大学、企業からの協力がなされ、進路実現に向けた取り組みが充実している。	A	①全人教育の実現を図るとともに、学習目標の達成度を適切に評価し、その分析を通じて学習指導研究、カリキュラム開発研究、評価方法研究(ルーブリックなど)を展開する。 ②大学、地域、アカシア会、企業等から一層の協力を受け、グローバル人材に求められる資質・能力の育成をすすめる。
	生徒指導	【国際標準の学力を育成するための先導的な次世代カリキュラムの開発を進める。】	①生徒が有意義な学校生活をおくるように、生徒会活動を支援。 ②社会的ルール遵守や規範意識の向上を図る生徒指導の充実。	①生徒が主体的に活動する生徒会行事の運営を支援し、学校評価(生徒)アンケートで「学校行事・生徒会活動」に関して肯定的回答80%以上を得る。 ②各学期末のアンケート、日常の生徒観察などからいじめ訴えの実態把握に努め、いじめ防止委員会を毎月開催して情報共有、対応にあたる。学校評価(生徒)アンケートで「先生の指導」に関して肯定的回答80%以上を得る。	①生徒会の主体的な運営を支援し、体育祭では衣装準備や会場整理等においてPTAからアイデアや協力が得られ、新しいスタイルを工夫した企画運営を支援した。「学校行事・生徒会活動」に関して生徒の肯定的回答91%であった。 ②日常的に丁寧な生徒支援を行うことでいじめ認知数は増えているが、組織的対応により大きな問題に至らず、生徒や保護者との丁寧な面談等を通じて、心身の成長を促している。いじめ防止対策基本方針に基づき事実ごとに対応を行っているが、発達段階に応じた指導等に関する教員研修も必要と考えている。生徒部長講話は各学期2回実施して学校生活充実の支援を行った。「先生の指導」に関して生徒の肯定的回答89%であった。	A	①学校行事・生徒会活動に対して高評価である。一方、部活動への評価は低い。生徒の活動が活発化するためには体育館に空調設備が整うといふのではない。 ②いじめ防止委員会が定例開催され、生徒の実態把握と共有に取り組まれて、重大事態に臨んだ際にも適切な対応ができています。教員の指導に対する肯定的回答は高く、公平な学習指導、教員による親身な指導がなされている。	A	①自由・自主・自律の精神についての自覚を高め、生徒会活動の充実を図る。体育館への空調設備設置等、生徒の安全な教育環境設備のため、継続的に大学への要望を行う。 ②生徒会活動、生徒指導を通して、社会的ルール遵守等の規範意識を促す。生徒指導に関して課題予防的指導にとどまらず、授業や生徒会活動の場面とつながった発達支持的生徒指導をすすめる。
	保健指導	【国際標準の学力を育成するための先導的な次世代カリキュラムの開発を進める。】	保健指導、スクールカウンセリング等の充実による生徒の健全な学校生活の支援。	保健室から年3回の「保健だより」等に基づく保健指導を行い、生徒会保健委員会による「保健新聞」年2回発行の活動等を支援する。学校医、スクールカウンセラーとの連携を強化し、スクールカウンセラーは週2日実施、スペシャルサポーターは週2日開設する。学校評価(生徒)アンケートで「悩みへの相談」に関して肯定的回答80%以上を得る。	心理的課題を抱えている生徒は多く、生徒相談の充実を図り、担任面談は全クラスで定期的に行っている。学校医、スクールカウンセラーとの連携を強化し、スクールカウンセラー(週2日)、スペシャルサポーター(週2日)からの情報共有を工夫し、ケース会議も実施した。「保健だより」発行等も計画通り実施し、健全な学校生活を支える保健指導を行った。さらに、薬物乱用を根絶する規範意識の向上を目的に専門家による薬物乱用防止教室を開催するなど、外部専門家からの支援も充実させた。「悩みへの相談」に関して生徒の肯定的回答88%であった。	A	学校長による強力なリーダーシップのもと、スクールカウンセラーなど、子どもたちの心身の健康をサポートする盤石な体制が整えられている。生徒と教員の定期的な相談の機会といつても相談ののつてもらえる態勢がある。ストレスを感じること多い実態を把握して、さまざまな事情と悩みを抱える子どもたちに寄り添う環境と細やかな相談活動を充実させてほしい。	A	①②心身ともに健康な学校生活の実現を図る。ストレスや悩みを抱えている生徒の実態を把握した上で、スクールカウンセラー、SSR指導員と教職員との連携を強化し組織的に対応する。生徒一人ひとりが心身ともに健康な学校生活を送ることが出来るよう生徒相談を充実させる。

注) ☐ 太枠内は、学校関係者評価委員会が記入する。

令和5年度 学校関係者評価報告書

評価点

自己評価		学校関係者評価	
A	高いレベルで達成できた	A	とても適切である
B	達成できた	B	概ね適切である
C	一部達成できなかった	C	あまり適切でない
D	ほとんど達成できなかった	D	適切でない
		E	判定できない

学校(園)名: 広島大学附属中・高等学校

分野	重点目標 (評価項目)	年度計画(中期計画・ 中期目標)との関連性	具体的方策	成果指標・判断基準	自己評価		学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
					達成状況、改善策	評価	意見・理由	評価	
教育実習	教育実習	【人間社会科学研究科教職開発専攻(教職大学院)及び教師教育プログラム教員等と教師教育や教員研修・教員養成のあり方について検討する。】	①大学との連携・協力の実質化に向けて、教育実習実施の具体的方策を提案。 ②教育実習生の教科指導力、授業力を向上させ、教職に対する高い使命感を涵養する教育実習の充実。	①大学との教育実習連絡協議会に年3回参加し、2回は教育実習の成果と課題に関して意見を提出する。教育実習実施の全教科で、大学教員の訪問を受けた授業協議等を各1回以上実施する。 ②各教育実習生が平均5回以上の授業実践、授業協議を行い、教育実習終了後の自己評価において授業力向上等に関する肯定的評価80%以上を得る。	①年3回の教育実習連絡協議会に参加し、2回は教育実習の成果と課題に関して大学との協議に資する意見を提出した。教育実習実施の全教科で、大学教員の訪問を受けた授業協議等を各1回以上実施した。 ②各教育実習生が平均5時間の授業実践と授業協議会を行い、教育実習終了後の自己評価において授業力向上等に関する肯定的評価99.9%であった。	A	①②教育実習生の自己評価において授業力向上に関する肯定的評価が99.9%と稀に見る高評価である。授業への指導、協議会の深まり等、取り組みの成果であることを評価したい。実習生の課題を明確につかみ、大学と共有し、力を合わせて教職に対する高い使命感と生徒愛、教育への情熱にあふれた人格の育成を図ってほしい。	A	①②③先進的・先駆的な教育活動や国際標準の学力を育成を目指した教育活動を通じて、新たな学びの方法を備えた教員を養成するための指導計画を構築する。大学と連携・協力して教育実習指導の方法や評価方法について具体的方策を提案する。
先進的、先駆的な研究推進	研究開発 (スーパーサイエンスハイスクール)	【スーパーサイエンスハイスクール(SSH)事業、研究開発学校としての実践研究、大学教員と連携・協力した教育研究活動等を一層推進する。社会に開かれた科学技術を先導する人材育成の起点となる科学教育カリキュラムの開発等の成果を我が国の初等・中等・高等教育の水準を向上させるために全国に展開する。】	SSH先導的改革型第1期「イノベーティブな科学技術人材育成の起点となる国際的に通じる科学教育カリキュラムの開発の研究開発」の推進。STEAM教育の視点から6つの資質・能力(IMPACT)の育成を図る科学教育プログラムを開発するためのカリキュラム・マネジメント、学校設定科目の実施。高大接続プログラムをすすめる「広大AP」を実施。	SSH先導的改革型の研究開発を開始し、AS・GSのクラス分けを廃して、新たに選択コース制を導入する。全生徒を対象に課題研究を中核とした科学教育プログラムを実施する。広大APは20名以上の履修希望者を募り、15名以上の単位認定を目指す。実施の成果と課題を検証し、参加生徒の肯定的評価80%を得る。学校評価(保護者)アンケートにおいて「SSHの取り組み」に関して肯定的回答80%以上を得る。	イノベーションに関する内容を強化し、教材やシラバスの再整理、既刊の課題研究指導書「広大メソッド」の充実を図る改訂の検討を行った。SSH課題研究を持続可能なものとするため、指導のノウハウをさらに共有するなど工夫したい。大学との協働により高大接続プログラムをすすめる、APの効果を検証している。高校2年生徒がのべ53名受講し、のべ32名(60%)が単位認定された。参加生徒の肯定的評価は94%であった。「SSHの取り組み」に関して、生徒の肯定的回答90%、保護者の肯定的回答96%であった。	A	SSH事業21年目となり非常に高い成果を上げている。GSの生徒も興味深い研究が行われ、学びに対する自主性が発揮される取り組みであると評価する。大学との協働により高大連携・接続プログラムをすすめており、広大APへの参加生徒からの評価も高い。課題研究の進化・発展を目指して、「課題研究」を中核とした科学教育カリキュラムを実施し、「課題研究指導書(広大メソッド)」の改定に取り組んでいる。予算的なものを含めて今後の戦略を期待する。	A	SSH先導改革型第1期2年目においてSSH事業を確実にすすめる、研究開発の実施内容および評価を行う。得られた成果を可視化し、学校Webページ等を通して広く発信する。高大接続プログラムに関して生徒が自発的に受講し、評価は高くなっている。広島大学APをさらにすすめる、高大接続のモデルを実践的に研究し、高大連携の一層の充実を図る。高校生が広大APで大学教養科目を受講できることの意義、大学の単位との互換性について生徒に伝えるとともに、高校での学びにつなぐ方法を検討する。
	国際交流	【国際標準の学力を育成するための先導的な次世代カリキュラムの開発を進める。研究開発等の成果を我が国の初等・中等・高等教育の水準を向上させるために全国に展開する。】	グローバルマインドの高揚を図り、海外連携校との交流事業を計画、実施。海外連携校とのアジア科学教育コンソーシアム構築の基盤を構築。	海外連携校との交流プログラムを年3回以上実施する。学校評価(生徒)アンケートにおいて「学校全体の国際交流」に関して60%以上の肯定的回答を得る。	海外連携校との研究交流や協議を行うことで、SSH先導的改革型第1期最終年次(令和7年度)での3か国合同課題研究発表会への基盤をつくった。韓国やタイの連携校との研究交流は、4年ぶりに対面実施した。韓国(天安中央高等学校)へ訪問(7月)、韓国(ムンサンソク高等学校)へ訪問(11月)した。タイでのサイエンスフェア「TJ-SSF2023」(12月)、プリンセスチュラポーン・サイエンスハイスクールと日本のSSH高校及び高専が参加)では、生徒が口頭発表とポスター発表を行った。また、韓国(天安中央高等学校)から訪日研修(1月)、タイ(プリンセスチュラポーン・サイエンスハイスクールクマハン校)からの訪日研修(2月)を実施、科学共同授業や課題研究交流を行った。「学校全体の国際交流」に関して生徒の肯定的回答71%であった。	A	SSH海外連携校との対面での研究交流を復活することができた。参加した生徒の評価は高く、課題研究の研究結果の発表と議論等の高度な研究交流活動が行われた。令和7年度開催予定の3か国合同課題研究発表会への基盤づくりに向けて取り組まれている。	A	国際的に通用する科学教育カリキュラムに発展させる。海外連携事業を通じて、研究開発の課題を共有し、広島大学と高大連携・高大接続による「高等学校におけるアジア科学教育コンソーシアム」の構築に向けて組織づくりを行う。
	中等教育研究開発	【研究開発等の成果を我が国の初等・中等・高等教育の水準を向上させるために全国に展開する。】	「カリキュラム・マネジメントを志向した学びの価値の創造—STEAM教育の考えを生かして—」をテーマに教育研究大会を開催し、授業公開や研究発表、研究協議を実施し、授業づくりを提案。校内研究授業を各教科で年2回以上、全体でも年1回は授業研究を実施。	コロナ禍前とは状況が異なるため比較できないが、教育研究大会への公立学校からの参加者数や意見、過去の教育研究大会の資料等のWeb公開資料の閲覧数等、一定程度の数を得る。奨励研究にも応募を推奨して2件以上の採択を得る。	教育研究大会(11月)には校外から約300名の参加を得て、充実した研究協議を行った。今年度は研究部に全教科から1名ずつ教員を配置して、教科を超えた視点からも頻繁な教育研究の協議を深める機会を設けて教育研究の質的転換を図る改善に努めた。教科別および全体での校内研究授業は計画通り実施した。令和5年度は奨励研究に校内で3件が採択された。	A	各教科ならびに通教科的な視点から様々な教材開発と教育実践を積み重ね、研究大会においてその成果を広く発信できている。過去の公開授業の学習指導案や研究協議等の記録だけでなく授業実践事例がWebページに掲載されており、研究成果が活用されている。	A	教育研究テーマを設定し、教育研究大会での公開授業や研究発表等を通して、10年後の学習指導要領改訂を先取りした各教科ならびに探究学習等の通教科的な教育研究実績を積み上げ、全国をリードする研究開発を推進する。教育研究大会を開催し、全国の教員に実践研究の成果を提供する。
	学部・附属学校共同研究	【学部・研究科等と連携し先導的な教育モデルを開発し、その成果を展開することで学校教育の水準の向上を目指す。】	学部・附属学校共同研究プロジェクトにおいて、本校教員が代表となるプロジェクトに応募し採択を目指す。	本校教員が代表の2か年計画共同研究プロジェクトに令和4年度は3件採択されているが、令和5年度も新たに応募して2件以上の採択を得る。	令和5年度採択のプロジェクトは、大学全体で新規採択8件のうち2件が本校教員が代表のプロジェクトであった。各教科の実践研究は長年行ってきたが、教科横断的視点での研究も加わってきた。令和4年度採択のプロジェクトとともに、研究を進めている。	A	大学、他附属学校園の教員との連携により、先進的な教育研究開発の実践が積極的に行われている。	A	広島大学、附属学校間との先進的な教育研究開発プロジェクトをすすめる、その成果発表を推進する。
グローバル教育推進 ユネスコ教育	【国際標準の学力を育成するための先導的な次世代カリキュラムの開発を進める。】	ユネスコスクールとして国内外の機関と連携し、ユネスコ活動を行う生徒会、班活動を支援。SSH、SDGsに関わる教育を研究・推進し、持続可能な社会を先導するためのカリキュラム開発を推進。	ユネスコ協会関係等の対外行事に参加、ユネスコスクールとしての活動を対外的に報告し、適切な評価を受ける。学校評価(生徒)アンケートにおいて「環境問題、国際理解、平和学習の学習の機会」に関して60%以上の肯定的回答を得る。	広島ユネスコ協会「平和の鐘を鳴らそう2023」の集いへ本校生徒が参加し、参加者を代表して「平和のスピーチ」を1名が日本語で、1名が英語で行った。また、平和公園碑巡り、慰霊追悼の集い、平和の鐘を鳴らそう、長崎の高校生との交流、外国人向けパンフレットと他校への碑巡り案内等の活動実績が高く評価され、「第26回広島ユネスコ活動奨励賞」を受賞した。「環境問題、国際理解、平和学習の学習の機会」に関して生徒の肯定的回答75%であった。	A	ユネスコスクールとして国内外の機関と連携した活動を行っていること、生徒が平和活動においてグローバルに活躍していることを高く評価したい。多様性社会に適応するグローバル人材の育成に欠かせないコミュニケーション能力の向上を意図した指導に寄与していることに期待する。	A	ユネスコスクールに係る活動、SDGs活動をさらに推進し、本校におけるグローバル化に対応した教育の思想及び構造を策定し、成果を発信する。ユネスコ委員会やユネスコ班、個人での活動も引き続き支援し、ユネスコスクールとしての学校での研究実践も行う。グローバル・コンピテンシーの育成を進めるため、海外連携プロジェクトの具体的方策を精査する。	

注) ☐ 太枠内は、学校関係者評価委員会が記入する。